

日本学術会議会則（案）について

➤ 第一章～第五章、第十五章 概要 ※今回初出の章

（第二章 会議体）

- ・ 学術会議の会議体は、総会、役員会、会員候補者選定委員会、分野別業績審査委員会、選定助言委員会、運営助言委員会、部会、連合部会、委員会、分科会、小分科会、小委員会、若手アカデミー会議及び若手アカデミーに置かれる分科会とする。【P. 4】
- ・ 会議体の議長、公開、議事の運営（議決等）、会議体への出席、メール審議等、各会議体の共通事項をまとめて規定する。【P. 4～】

※会議体へのオンライン出席を可能とする。また、議長が必要と認めるときは、フルオンライン開催とすることができる。【P. 6】

※議長が必要と認めるとき（総会の場合は、やむを得ない理由により緊急に審議及び議決を行うことが必要と認めるとき）は、電子メールその他の電磁的方法（※Teams を想定）により、審議及び議決を行うことができる。【P. 6-7】

（第三章 総会）

- ・ 総会は、原則として毎年2月又は3月、6月、10月にそれぞれ開催する。【P. 7】
- ・ 30人以上の会員の同意をもって、招集の目的・議案を示して総会の招集を議長（会長）に求めることができる。【P. 7】
- ・ 総会の議決方法は、①挙手、②オンライン投票システムによる投票、③投票箱への投票とする（組み合わせで実施も可）。【P. 10】

（第四章-① 会長の選任等）

- ・ あらかじめ会長の選任の基準及び方法その他必要な事項に関する方針（以下「会長の選任方針」という。）を定め、それに基づき会長の選任を行う。【P. 13】
- ・ 会長の選任方針は、会長候補者選考委員会が案を作成し、総会が決定する。【P. 13】
- ・ 会長候補者選考委員会は、総会における会長の選任に先立ち、会長の候補者を選考することができる。【P. 13】
- ・ 会長の選任は、オンライン投票システムを利用することができる。投票手続等は、会長の選任方針において定める。【P. 14】

（第四章-② 副会長の職務等）

- ・ 副会長は、次の事項を分担してつかさどる。【P. 15】
 - 一 科学者間の連携に関すること。
 - 二 学術会議が行う意思の表出に関すること。
 - 三 学術会議と政府、社会及び国民等との関係に関すること。
 - 四 学術会議の国際活動に関すること。
 - 五 学術会議の財務等の組織運営に関すること。

(第四章-③ 会長特別補佐)

- ・ 会長特別補佐を若干名置くことができる。【P. 16】
- ・ 会長特別補佐は、特定の会長の職務（会長が定めるもの）について、会長を補佐する。【P. 16】

(第五章 役員会)

- ・ 役員会は、原則として毎月一回開催する。【P. 17】
- ・ 会長は、監事、会長特別補佐、職員のほか、会長が必要と認める者に役員会において意見を述べさせ、又は説明をさせることができる。【P. 17】
- ・ 総会は、会則において、役員会又は会長が定めることとした事項を定める権限を、役員会又は会長に委任する。【P. 18】
- ・ 役員会は、必要と認める事項に関する権限を、会長に委任することができる。会長は、委任された事項に関し、必要があると認めるときは、役員会の意見を聴くことができる。【P. 18】

(第十五章 会則の改正)【P】

- ・ 会則の改正は、法律上の規定（過半数をもって決する）にかかわらず、総会において出席会員の三分の二以上の賛成がなければ行うことができないこととするか。【P. 54】
- ※現行は、法において総会の議決は多数決によることとされているが、会則の改正については、会則において出席会員の三分の二以上の賛成がなければ改正できないこととなっている。

➤ 第六章～第十四章 前回準備委員会からの主な修正点

(会長)

- ・ 会長の常勤に関する規定を置く場合は、本人の意思に基づき常勤とすることができるよう、「ただし、会長は、総会の同意を得て、常勤とすることができる。」としてはどうか。【P. 23】

(地区会議・地方学術会議)

- ・ 地区会議は組織として規定する。現行の地方学術会議は名称や内容を含めより柔軟に活動できるよう、「日本学術会議が実施する地方における学術の振興のための取組」として位置付ける。
会則上の整理としては、個別の規定を置かずに、シンポジウム、フォーラム等に関する規定で読むこととし、シンポジウム、フォーラム等の条に、連携の対象として地方公共団体、地域や各種団体の代表者等を追加してはどうか。【P. 33】
また、社会活動・広報委員会の職務について、地方学術会議に関しては「日本学術会議が実施する地方における学術の振興に関すること（地区会議が実施するものを除く。）」としてはどうか。【P. 56】

その他、法令上の用例等も踏まえ、文言の適正化等を行った。

(案文)

➤ 日本学術会議会則（案）

法律上の規定、準備委員会の方針等	新会則 案文	現行規程
制定文等	日本学術会議法（令和七年法律第七十号）第六条の規定に基づき、日本学術会議規則として、日本学術会議会則を次のように定める。 日本学術会議会則 目次 第一章 総則 第二章 学術会議の会議体 第三章 総会 第四章 役員等 第五章 役員会 第六章 会員候補者選定委員会、選定助言委員会及び運営助言委員会 第七章 会員 第八章 業務 第九章 中期的な活動計画等 第十章 連携会員 第十一章 部 第十二章 委員会 第十三章 若手アカデミー 第十四章 事務局 第十五章 雑則 附則	日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号）第二十八条の規定に基づき、日本学術会議会則（昭和二十四年日本学術会議規則第一号の全部を改正する規則を次のように定める。 日本学術会議会則 目次 第一章 総則（第一条） 第二章 職務（第二条、第三条） 第三章 組織（第四条—第六条） 第四章 会員及び連携会員の選考等（第七条—第十五条） 第五章 会議（第十六条） 第六章 総会（第十七条—第十九条） 第七章 部会（第二十条—第二十二条） 第八章 幹事会（第二十三条—第二十六条） 第九章 委員会（第二十七条—第三十二条） 第十章 地区会議（第三十三条） 第十一章 若手アカデミー（第三十四条） 第十二章 栄誉会員（第三十五条） 第十三章 日本学術会議協力学術研究団体（第三十六条） 第十四章 雑則（第三十七条—第三十九条） 附則

第一章 総則		
●日本学術会議法（令和7年法律第70号） （以下「法」という。） （日本学術会議規則） 第六条 会議は、次に掲げる事項について、日本学術会議規則を定めるものとする。 一 この法律の他の規定により日本学術会議規則で定めることとされている事項 二 前号に掲げるもののほか、会議の運営に係る基本的な事項	（総則） 第一条 日本学術会議（以下「学術会議」という。）の運営に関する事項は、この<u>日本学術会議会則</u>（以下「会則」という。）の定めるところによる。	●日本学術会議会則（平成17年日本学術会議規則第3号） （総則） 第一条 日本学術会議（以下「学術会議」という。）の運営に関する事項は、この<u>会則</u>の定めるところによる。
第二章 学術会議の会議体		
	（学術会議の会議体） 第〇条 学術会議の会議体は、総会、役員会、会員候補者選定委員会、分野別業績審査委員会、選定助言委員会、運営助言委員会、部会、連合部会、第〇条第一項の委員会、第〇条第〇項の分科会、小分科会、小委員会、若手アカデミー会議及び第〇条第〇項の分科会【注：若手アカデミーの分科会】とする。 2 前項の規定は、前項の会議体のほかに、学術会議に合議体を置くことを妨げない。	【参考】 ●日本学術会議会則 （学術会議の会議） 第十六条 学術会議の会議は、総会、部会及び連合部会のほか、幹事会並びに法第十五条の二の規定により置かれる常置の委員会として、機能別委員会及び分野別委員会並びに臨時の委員会として、課題別委員会及びその他幹事会の議決により置かれる委員会とする。 （2～3 略）
	（会議体の議長等） 第〇条 各会議体（総会及び連合部会を除く。）の長（役員会にあつては、会長）は、議長となり、各会議の議事を整理する。 2 各会議体（総会、役員会及び連合部会を除く。）は、議長が招集する。ただし、会長（会長が任期途中で退任した場合の後任の者を除く。）の任期に	●日本学術会議会則 （総会の議長等） 第十八条 会長は、総会の議長として議事を整理する。 2 総会における議決の際、可否同数の場合は、会長がこれを決定する。

	おける最初の各会議体（総会、役員会、連合部会、第〇条第〇項の分科会、小分科会、小委員会、第〇条第〇項の分科会【注：若手アカデミーの分科会】を除く。）は、会長が招集する。 3 各会議体の議長は、議長が必要と認める者の出席を求め、意見を聴くことができる。 4 各会議体（会員候補者選定委員会及び分野別業績審査委員会を除く。）は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、議長は、議決を経て非公開とすることができる。 5 各会議体の議長は、各会議体（会員候補者選定委員会及び分野別業績審査委員会を除く。）を招集しようとするときは、あらかじめ、開催日時、開催場所及び傍聴可能人数について、インターネットの利用その他の適切な方法により一般に周知するものとする。 6 前項の傍聴可能人数は、各会議体の議長が定める。 （会議体の議事の運営） 第〇条 各会議体（総会を除く。）は、各会議体を構成する委員等（以下「構成員」という。）の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。 2 各会議体（総会を除く。）の議決は、出席した構成員の過半数で決し、可否同数のときは、各会議体の議長の決するところによる。	3 会長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。 4 総会は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、会長は、議決を経て非公開とすることができる。 5 （略） ●日本学術会議細則（平成 17 年日本学術会議総会決定） （公開の手続） 第 9 条 議長は、総会を開催する場合は、開催日時、開催場所、傍聴可能人数につき、事前に適当な手段をもって周知することとする。 2 総会の傍聴可能人数は、議長が定める。
--	---	---

	(会議体への出席) 第〇条 各会議体への出席は、映像及び音声の送受信により相手の状態を相互に認識しながら通話することができるシステム（以下「オンライン会議システム」という。）を利用する方法（以下「オンライン出席」という。）によることができる。 2 各会議体の議長は、必要と認めるときは、各会議体の招集に当たって、全構成員にオンライン出席を求めることができる。	【参考】 ●日本学術会議総会におけるオンライン出席の取扱いについて（日本学術会議第346回幹事会決定） I. 総則 (1) 日本学術会議総会（以下「総会」という。）の開催通知に記載された場所（特段の事情がない限り日本学術会議庁舎講堂）での出席（以下「現地出席」という。）を原則とし、会長は、会員に対し、現地出席を推奨する。 (2) 本決定に基づいて認められた場合に限り、会員（会長及び副会長を除く。）は情報通信機器（映像及び音声の送受信により相手方の状態を相互に確認しながら通話することができるシステム。以下「オンライン会議システム」という。）を利用する方法によって総会に出席すること（以下「オンライン出席」という。）ができることとし、日本学術会議法（昭和23年法律第121号）第24条第1項の「出席」として扱う。【参考】
<準備委員会方針> ・緊急時等の会長が認めた場合に限りフルオンライン又はメール審議により総会を開催することができることとする。	(緊急時の審議及び議決の特例) 第〇条 各会議体は、議長が必要と認めるとき（会議体が総会の場合にあっては、議長がやむを得ない理由により緊急に審議及び議決を行うことが必要と認めるときに限る。）は、電子メールその他の電磁的方法により議案の内容を構成員に通知し、議案の可否に係る意思を確認する方法により、審議及び議決を行うことができるものとする。	

	2 前項の方法による場合は、電子メールその他の電磁的方法により議案の可否に係る意思を回答した人数をもって、第〇条第一項【注：議事の運営の条】の出席の人数（会議体が総会の場合にあっては、法第十三条第一項の出席の人数）とみなす。 3 第一項の方法による場合は、第〇条【議事の公開、公開の手続】（会議体が総会の場合にあっては、第〇条【議事の公開、公開の手続】及び第〇条【総会の章の議案の提出のうち2～6項、報告の手続】）の規定は適用しない。	
第三章 総会		
（総会の職務） 第十条 総会は、次に掲げる職務を行う。 一 この法律の他の規定又は準用通則法（第五十二条において準用する独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）をいう。以下同じ。）の規定により総会の決議、承認又は同意を要する事項についての決議、承認又は同意 二 前号に掲げるもののほか、第三十七条に規定する業務（会議の経営に関する事務を除く。）をつかさどること。 三 会長及び副会長の職務の監督 四 前三号に掲げるもののほか、日本学術会議規則で定めるところにより総会が行うこととされている職務 （総会の組織）	（総会の招集） 第〇条 <u>議長は、原則として毎年二月又は三月、六月及び十月にそれぞれ総会を招集する。</u> 2 <u>会員は、三十人以上の会員の同意をもって、招集の目的及び議案を示して総会の招集を議長に求めることができる。</u>	●日本学術会議会則 （総会の招集） 第十七条 総会は、原則として<u>毎年四月及び十月に会長が招集する。</u> 2 <u>前項のほか、会長は、幹事会の議決に基づいて、臨時の総会を招集することができる。</u> 3 <u>前二項の規定にかかわらず、三十人以上の会員から招集の目的及び議案を示して請求がある場合、会長は、総会を招集しなければならない。</u>

第十一条 総会は、全ての会員をもって組織する。 2 総会に、議長を置く。 3 総会の議長（以下「議長」という。）は、会長とする。 4 議長は、総会の会務を総理する。 5 会長は、あらかじめ、副会長のうちから、会長に事故がある場合に議長の職務を代理する者を定めておかなければならない。 （総会の招集） 第十二条 総会は、議長（議長に事故があるときは、前条第五項に規定する議長の職務を代理する者。以下この節において同じ。）が招集する。 2 議長は、日本学術会議規則で定めるところにより、定期的に総会を招集しなければならない。 3 議長は、第二十八条第一項の規定により行う会員の選任後、遅滞なく、会長を選任するための総会を招集しなければならない。 4 議長は、必要があると認めるときは、総会を招集することができる。 5 議長は、会員の総数の三分の一以上の会員が必要と認めて議長に対しその招集を請求したとき、又は監事が第二十条第一項（第一号に係る部分に限る。）の規定による報告のため議長に対しその招集を請求したときは、これ		
--	--	--

らの請求があった日以後二十日以内に総会を招集しなければならない。 <準備委員会方針> ・ 総会の開催時期について、2～3月、6月、10月に原則として対面（オンライン併用）の総会を開催することとする。 ※2～3月の総会について、期間は1日の開催とする。 ・ 年度計画や予算について、3月末までに開催が必要 ・ 自己点検評価や財務諸表等について、6月末までに開催が必要 ・ 総会の招集要件として、当面の間、30人の会員が、議案を示して総会の招集を会長に求めることができることとする。		
（議事の運営） 第十三条 総会は、議長が出席し、かつ、会員の総数の二分の一以上の出席がなければ、開くことができない。 2 総会の議事は、議決に加わることができる会員の二分の一以上が出席し、出席した当該会員の過半数をもって決する。可否同数のときは、議長が決する。 3 前項の規定にかかわらず、次に掲げる総会の決議は、議決に加わることができる会員の三分の二以上に当たる多数をもって行わなければならない。	（総会の議事録） 第〇条 <u>議長</u>は、総会の<u>議事録</u>を作成し、インターネットを利用して閲覧に供するものとする。ただし、学術会議の運営上支障があると認める場合、閲覧に供しないことができる。	●日本学術会議会則 （総会の議長等） 第十八条 （1～4 略） 5 <u>会長</u>は、総会の<u>会議録</u>を作成し、インターネットを利用して<u>閲覧の用</u>に供するものとする。ただし、学術会議の運営上支障があると認める場合、<u>閲覧の用</u>に供しないことができる。

一 第三十二条第四項の総会の決議 二 第三十三条第二項の承認に係る第三十六条第一項の総会の決議 4 前二項の決議について特別の利害関係を有する会員は、議決に加わることができない。 5 この法律に定めるもののほか、議事の手続その他総会の運営に関し必要な事項は、日本学術会議規則で定める。 (議事録の公表) 第十五条 会議は、総会の定めるところにより、総会の議事録を作成し、速やかに、公表しなければならない。		
	(総会の議決) 第〇条 総会の議決は、<u>次に掲げる方法のいずれか又はこれらの組み合わせにより行う。</u> 一 可とする議案に挙手すること。 二 オンライン投票システム（当該システムを操作することにより、当該システムにおいて議案の可否を選択し、かつ、選択の内容を電磁的記録として記録することができるシステムをいう。－）により投票すること。 三 議案を可とする会員は青票を、議案を否とする会員は赤票を、議案の可否を決しない会員は白票を投票箱に投入すること。	●日本学術会議細則 (総会の議決) 第4条 総会の議決の方法は、<u>次のとおりとする。</u> (1) 議長が採決をする場合は、原則として議案を可とする会員の挙手を求め、挙手の多少を認定して可否の結果を宣告する。ただし、オンライン会議システム（映像及び音声の送受信により相手方の状態を相互に確認しながら通話することができるシステムをいう。以下この条において同じ。）を利用して出席する会員は、同システムにおける機能を利用して挙手を行う。 (2) 議長が可否の多少を認定し難いとき又は出席会員から挙手の多少を認定し難いとして異

		議が唱えられたときは、議長は投票で採決をする。 (3) 投票を行う場合は、出席会員はすべて、名札票を名札箱に投入するとともに、議案を可とする会員は青票を、議案を否とする会員は赤票を、議案の可否を決しない会員は白票を投票箱に投入する。ただし、オンライン会議システムを利用して出席する会員は、同システムにおける機能を利用して本規定に準じた投票を行う。この場合において、議長は投票を行わない。 (4) 会則第18条第2項に定める可否同数の場合とは、前号の可とする票数の2倍の数が名札票の数と同一のときとする。
<準備委員会方針> ・議案の提出についても同様に、当面の間、30人の会員により議案を提出できることとする。	(議案の提出) 第〇条 総会の議案の提出者は、<u>法に定めるもののほか、次のとおりとする。</u> 一 会長 二 副会長 三 三十人以上の会員 2 議案の提出者は、総会開催の十四日以前に開催される<u>役員会</u>に付議できるよう、会長に議案を提出することとする。緊急の場合においても、あらかじめ<u>役員会</u>に付議できるよう提出することとする。	●日本学術会議細則 (議案の提出) 第5条 総会の議案の提出者は、次のとおりとする。 (1) 会長 (2) 副会長 (3) 30人以上の会員 2 議案の提出者は、総会開催の14日以前に開催される<u>幹事会</u>に付議できるよう、会長に議案を提出することとする。緊急の場合においても、あらかじめ<u>幹事会</u>に付議できるよう提出することとする。

	3 会長は、提出された議案を<u>役員会</u>に付議する。 <u>役員会</u>は、議案について提出者に助言することができる。 4 提出者は、前項の助言に基づき、必要に応じ議案を修正の上、議案を<u>議長</u>に提出する。 5 <u>議長</u>は、提出された議案を総会に付議する。役員会の意見のうち、議案に反映されないものについては、<u>議長</u>が総会において当該意見を述べるものとする。 6 総会において二人以上の会員により議案の修正提案が行われた場合は、<u>議長</u>は、必要に応じ総会の休憩を求め、<u>役員会</u>又は関係する部若しくは委員会（<u>第〇条の委員会をいう。</u>）の意見を聴くことができる。 7 議案の提出資料の様式は、<u>役員会が定める。</u>	3 会長は、提出された議案を<u>幹事会</u>に付議する。<u>幹事会</u>は、議案について提出者に助言することができる。 4 提出者は、前項の助言に基づき、必要に応じ議案を修正の上、議案を<u>会長</u>に提出する。 5 <u>会長</u>は、提出された議案を総会に付議する。<u>幹事会</u>の意見のうち、議案に反映されないものについては、<u>会長</u>が総会において当該意見を述べるものとする。 6 総会において2人以上の会員により議案の修正提案が行われた場合は、<u>会長</u>は、必要に応じ総会の休憩を求め、<u>幹事会</u>又は関係する部若しくは委員会の意見を聴くことができる。 （提出資料の様式） 第7条 議案及び報告のための提出資料の様式は、<u>別表第1のとおりとする。</u>
	（報告の手続） 第〇条 総会に報告する案件を有する会員又は連携会員（以下本条において「報告者」という。）は、原則として総会開催の七日以前に開催される役員会で報告することとする。 2 報告者は、<u>役員会</u>で報告した後、総会で報告することとする。	●日本学術会議細則 （報告の手続） 第6条 総会に報告する案件を有する会員又は連携会員（本条において「報告者」という。）は、原則として総会開催の7日以前に開催される幹事会で報告することとする。 2 報告者は、<u>幹事会</u>で報告した後、総会で報告することとする。 <u>（定足数）</u>

		<u>第8条 法第24条第1項の規定の適用については、海外出張者を除外する。この場合の海外出張者とは、その職務に関連して会長から出張命令を受けた者をいい、除外する期間は、当該出張命令を受けた期間に限る。</u>
	(総会の運営に関する事項の幹事会への委任) 第〇条 前各条に定めるもののほか、総会の運営に関し必要な事項は役員会が定める。	
第四三章 役員等		
(会長の職務) 第十六条 会長は、会議を代表し、及び議長の職務を行うほか、総会の定めるところに従い、会議の経営に関する事務を総理する。 2 会長は、定期的に、会議の経営の状況について、総会に報告しなければならない。 (会長の選任等) 第二十一条 会長は、特に優れた研究又は業績があり、人格が高潔で、かつ、会議の業務を適切かつ効果的に運営することができる能力を有する会員のうちから、総会が、その決議により選任する。 2 会長の任期は、選任の時から、当該選任後三年以内に到来する会員の任期の末日以後最初に開催される総会において次の会長が選任される時までとする。	(会長の選任等) 第〇条 法第二十一条第一項の規定に基づく会長の選任については、あらかじめ会長の選任の基準及び方法その他会長の選任に関し必要な事項に関する方針（以下「会長の選任方針」という。）を定めるものとし、当該会長の選任方針に基づき会長の選任を行う。 2 会長の選任方針は、会長候補者選考委員会が案を作成し、総会がこれを決定する。 3 会長候補者選考委員会は、会長の選任が行われる総会の開催に先立ち、当該総会の開催時における会員（法第二十九条第一項に規定する会員の候補者を含む。以下本条及び次条において同じ。）の中から会長の候補者を選考することができる。	●日本学術会議会則 (会長の互選等) 第四条 法第八条第二項の会長の互選は、他の案件に先立って総会で行うものとする。 2 前項に規定するもののほか、会長の互選に関する事項は、総会が定める。

3 会長は、会長としての職務の執行が特に優れたものであるときは、一回に限り再任されることができる。 4 会議は、会長が選任されたときは、遅滞なく、その旨を内閣総理大臣に届け出るとともに、会長の選任の理由その他内閣府令で定める事項を公表しなければならない。		
<準備委員会方針案> ・会長候補者選考に向けた手続の流れについて、以下の案があり得るのではないか。 (手続については省略) ・成立時総会の会長職務代行者は、会長候補者以外の会員で形式的な条件で選ぶこととしてはどうか（例えば、最年長又は最年少者）。	(会長の選任に関する資料) 第〇条 <u>議長は、会長の選任が行われる総会の開催に先立ち、会長の選任のための資料として、次に掲げる資料を当該総会の開催時における会員の閲覧に供する。</u> 一 <u>当該総会の開催時における会員の名簿（略歴等を含む。以下本条及び次条において「名簿」という。）</u> 二 <u>第〇条第三項の規定により会長の候補者の選考を行ったときは、会長の候補者の一覧</u> 三 <u>その他会長候補者選考委員会が必要と認める資料</u> (会長の選任に関する投票) 第〇条 <u>会長の選任は、総会に出席した会員の投票により行う。この投票は、単記無記名によることとし、オンライン投票システム（当該システムを操作することにより、当該システムにおいて候補者のいずれかを選択し、かつ、選択の内容を電磁的記録として記録することができるシステムをいう。）により行うことができる。</u>	●日本学術会議細則 (会長の互選) 第2条 <u>事務局長は、会長の互選のための資料として、互選が行われる総会時における会員（送付時には候補者である者を含む。以下本条において同じ。）に対し、総会に先立ち、次の資料を送付する。</u> (1) <u>互選が行われる総会時における会員の名簿（略歴等を含む。以下本条において「名簿」という。）</u> (2) その他幹事会が必要と認める資料 2 会長の互選は、総会に出席した会員の投票により行う。<u>この場合の投票の方法は、次のとおりとする。</u> (1) 会員は、前項の規定により送付された名簿に掲載された者のうち1人に投票する。この投票は、単記無記名による。 (2) 投票者数の過半数の票を得た者を会長の候補者とする。

	2 <u>前項の規定に関し必要な事項は、第〇条第一項に規定する会長の選任方針において定める。</u>	(3) 第1回の投票において、過半数を得た者がいないときは、過半数を得る者があるまで投票を行う。 (4) 第3回の投票において、過半数を得た者がいないときは、前2号の規定にかかわらず、当該投票における上位の得票者2人について決選投票を行い、多数を得た者を会長の候補者とする。ただし、決選投票を行うべき2人を定めるに当たり、並びに会長の候補者を定めるに当たり、得票数が同じときは、年長者をもってこれに充てる。 3 会長の候補者は、会長の職に就く意思がある場合、会長となる。会長の職に就く意思がない場合は、前項の互選を再度行う。 4 <u>前3項の規定に関し必要な事項は、幹事会が定める。</u> 5 (略)
(副会長の職務) 第十七条 副会長は、会長の定めるところにより、会長を補佐して総会の会務及び会議の経営に関する事務を掌理する。 2 副会長は、会長の定めるところにより、会長に事故があるときはその職務を代理し、会長が欠員のときはその職務を行う。 (副会長の任命等) 第二十二条 副会長の員数は、三人以内とする。	(副会長の職務) 第〇条 副会長は、会長が定めるところにより、次に掲げる事項を分担してつかさどる。 一 <u>科学者間の連携に関すること。</u> 二 <u>学術会議が行う意思の表出に関すること。</u> 三 <u>学術会議と政府、社会及び国民等との関係に関すること。</u> 四 <u>学術会議の国際活動に関すること。</u> 五 <u>学術会議の財務等の組織運営に関すること。</u>	●日本学術会議会則 (副会長の職務) 第五条 副会長は、会長が定めるところにより、次に掲げる事項をつかさどる。 一 <u>学術会議の組織運営及び科学者間の連携に関すること。</u> 二 <u>学術会議と政府、社会及び国民等との関係に関すること。</u> 三 <u>学術会議の国際活動に関すること。</u>

2 副会長は、会員のうちから、総会の同意を得て、会長が任命する。 3 副会長の任期は、当該副会長について会長が定める期間（その末日が会長の任期の末日以前であるものに限る。）とする。ただし、補欠の副会長の任期は、前任者の残任期間とする。 4 副会長は、再任されることができる。 5 前条第四項の規定は、副会長が任命されたときについて準用する。 <準備委員会方針> ・ 現行の副会長の職務規定において、財務などを明確化する。		
<準備委員会方針> ・ 副会長は引き続き3名とし、その他に会員のうちから会長が任命する会長特別補佐（仮称）を若干名置くことができることとする。 ・ 会長特別補佐（仮称）は機動的に設置できるようにするため、規定上は、職務を明示しない。	（会長特別補佐） 第〇条 学術会議に、会長特別補佐を置くことができる。 2 会長特別補佐の員数は、若干名とする。 3 会長特別補佐は、会長の定めるところにより、総会の会務及び会議の経営に関する事務のうち、特定のものに係る会長の職務について、会長を補佐する。 4 会長特別補佐は、会員のうちから、会長が任命する。 5 会長特別補佐の任期は、当該会長特別補佐について会長が定める期間（その末日が会長の任期の末日以前であるものに限る。）とする。 6 会長特別補佐は、再任されることができる。	【参考】 ●日本学術会議法（令和七年法律第七十号） （副会長の職務） 第十七条 副会長は、会長の定めるところにより、会長を補佐して総会の会務及び会議の経営に関する事務を掌理する。 2 （略） （副会長の任命等） 第二十二條 副会長の員数は、三人以内とする。 2 副会長は、会員のうちから、総会の同意を得て、会長が任命する。

		3 副会長の任期は、当該副会長について会長が定める期間（その末日が会長の任期の末日以前であるものに限る。）とする。ただし、補欠の副会長の任期は、前任者の残任期間とする。 4 副会長は、再任されることができる。 5 （略）
第 ~~五~~ 四章 役員会		
（役員会） 第十八条 役員会は、第三十六条第二項の規定により役員会の議を経なければならないとされている事項及び会長の職務に関し役員会が特に必要と認める重要事項を審議する。 2 役員会は、会長及び副会長並びに役員以外の会員のうちから会長が指名する者をもって組織する。 <準備委員会方針> 役員会の機能 ・役員会は、基本的に現行の幹事会と同様の構成・機能・運用とする。 ・原則として、月1回開催する。また、役員会終了後は記者会見を行う。 役員会の構成 ・役員会の構成「会長、副会長、会員から会長が指名する者」のうち、会員から会長が指名	（役員会の招集） 第〇条 <u>役員会</u>は、原則として毎月一回会長が招集する。 2 会長は、必要があると<u>認める</u>ときは、臨時に<u>役員会</u>を招集することができる。 （役員会の議事等） 第〇条 <u>会長は、監事、会長特別補佐、職員のほか、法第十八条第二項に規定する者（以下「役員会構成員」という。）以外の者であって会長が必要と認める者に役員会において意見を述べさせ、又は説明をさせることができる。</u> 2 役員会に関し必要な事項は、役員会が定める。 （役員会の附置委員会） 第〇条 役員会は、その任務の遂行上必要な委員会を附置することができる。	●日本学術会議会則 （幹事会の招集） 第二十三条 <u>幹事会</u>は、原則として毎月一回会長が招集する。 2 会長は、必要があると<u>認められる</u>ときは、臨時に<u>幹事会</u>を招集することができる。 （幹事会の議長等） 第二十四条 会長は、<u>幹事会</u>の議長となり、議事を整理する。 （幹事会の附置委員会） 第二十五条 幹事会は、その任務の遂行上必要な委員会を附置することができる。 2 前項の委員会には、幹事会の了承を得て、分科会又は小分科会を置くことができる。

する者として、部長、副部長、幹事を規定する。 ・事務局、会長特別補佐（仮称）は説明者として役員会に参加できることとする。 ・監事は法律上メンバーにならないこととされていることから、役員会にオブザーバー参加できることとする。なお、監事の業務に必要な質問を行うことができる。		【参考】 ●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号） 第十四条 日本学術会議に、その運営に関する事項を審議させるため、幹事会を置く。 2 幹事会は、会長、副会長、部長、副部長及び幹事をもつて組織する。 3 （略）
<準備委員会方針> 役員会の審議事項 ・基本的に現行の幹事会審議事項と同様の事項とする。 ※ただし、総会決議事項、会長の決定事項を除く。 ・財務や労務について役員会の審議事項として明記する。 会長の決定事項 ・委員会や各部が内容を精査しているものについては、柔軟に意思決定できるよう、会長の決定事項とする。 例：・国際会議への派遣者の決定 ・分科会、小委員会の委員の決定 ・協力学術研究団体の承認 ・会長の決定事項であっても、会長は必要に応じて役員会の意見を聴くことができることとする。	（役員会等への委任事項） 第〇条 総会は、業務を機動的に遂行するため、学術会議の運営及び法第三十七条に規定する業務のうちこの会則で定めるところにより役員会又は会長が定めることとした事項を定める権限は、それぞれ役員会又は会長に委任する。ただし、総会が当該権限を自ら行うことを妨げない。 2 前項の規定により役員会に委任された権限は、役員会で定めるところにより、会長に委任することができる。 3 会長は、前項の規定により役員会から委任された事項に関し、必要があると認めるときは、役員会の意見を聴くことができる。	●日本学術会議会則 （幹事会への委任事項） 第十九条 法第十四条第三項の規定に基づき、次に掲げる事項に関する権限を幹事会に委任する。 一 法第三条第一号に規定する職務のうち、第二条の意思の表出に関する事項 二 法第三条第二号に規定する職務のうち、第三条の国際活動に関する事項 三 法第四条の諮問に対する答申に関する事項 四 法第五条の勧告に関する事項 五 法第六条及び法第六条の二の規定に関する事項 （幹事会への委任） 第三十八条 総会に関する事項及びこの会則において総会で定めるとされているもののほか、会則の施行に関し必要な事項は、幹事会が定める。

第~~六~~五章 会員候補者選定委員会、選定助言委員会及び運営助言委員会

●日本学術会議法（令和 7 年法律第 70 号）

（以下「法」という。）

（会員候補者選定委員会）

第二十五条 会員候補者選定委員会は、次に掲げる職務を行う。

一 第三十条の規定による会員の候補者の選定

二 第三十一条第一項に規定する選定方針（第五項及び次条第一項第一号において「選定方針」という。）の案の作成

三 第三十二条第二項の規定による会員の解任の求め

四 前三号に掲げるもののほか、会員の選任及び解任に関する事務のうち、日本学術会議規則で定めるところにより会員候補者選定委員会が行うこととされているもの

2 会員候補者選定委員会は、会員候補者選定委員十人以上二十人以内をもって組織する。

3 会員候補者選定委員は、会員のうちから、総会が選任する。

4 会員候補者選定委員の任期は、選任の時から、当該選任後三年以内に到来する会員の任期の末日までとする。

5 会員の候補者の研究又は業績に関する審査を行うため、会員候補者選定委員会に、選定方針で定める研究分野ごとに、分野別業績審査委員会を置く。

（会員候補者選定委員会の委員等及び役員）

第〇条 法第二十五条に規定する会員候補者選定委員会（以下この条から第〇条までにおいて「委員会」という。）に、委員長一名及び副委員長一名を置く。

2 委員長は、委員の互選により選出する。

3 副委員長及び幹事は、委員会の同意を得て、委員長が指名する。

4 委員は、辞任しようとするときは、委員長に申し出るものとする。この場合において、委員は、辞任の申出の日又は委員が当該申出において辞任の日をあらかじめ指定したときは、その日をもって辞任する。

5 この規則に定めるもののほか、委員の選任に関し必要な事項は、役員会が定める。

~~（会員候補者選定委員会の招集）~~

~~第〇条 委員会は、委員長が招集する。ただし、会長（会長が任期途中で退任した場合の後任の者を除く。）の任期における最初の委員会は会長が招集する。~~

~~（会員候補者選定委員会の議事）~~

~~第〇条 委員長は、議事を整理する。~~

~~2 委員長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。~~

6 分野別業績審査委員会の委員は、当該分野別業績審査委員会に係る研究分野における会員の候補者の研究又は業績の審査を行うために必要な専門的知識を有する者のうちから、会員候補者選定委員会が選任する。	~~—(会員候補者選定委員会の議決)—~~ ~~第〇条—委員会は、委員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2—委員会の議決は、出席委員の多数決による。~~ ~~3—委員会における議決の際、可否同数の場合は、委員長がこれを決定する。~~ (分野別業績審査委員会) 第〇条 法第二十五条第五項に規定する分野別業績審査委員会の委員の選任及び運営に関し必要な事項は、<u>会員候補者選定委員会</u>が定める。 (会員候補者選定委員会に関する事項の<u>役員会委員会</u>への委任) 第〇条 ~~この規則前二条~~に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、<u>役員会委員会</u>が定める。	
(選定助言委員会) 第二十六条 選定助言委員会は、次に掲げる職務を行う。 一 選定方針の案の作成に関し、会員候補者選定委員会に対し、意見を述べること。 二 前号に掲げるもののほか、会員の候補者の選定に関し、会員候補者選定委員会の諮問に応じて意見を述べること。 2 選定助言委員会は、選定助言委員五人以上七人以内をもって組織する。 3 選定助言委員は、優れた研究又は業績を有する科学者（会員その他内閣府令で定める者	(選定助言委員会の委員<u>等及び役員</u>) 第〇条 法第二十六条に規定する選定助言委員会（以下この条から第〇条までにおいて「委員会」という。）に、委員長一名及び副委員長一名を置く。 2 委員長は、委員の互選により選出する。 3 副委員長<u>及び幹事</u>は、委員会の同意を得て、委員長が指名する。 4 委員は、辞任しようとするときは、委員長に申し出るものとする。この場合において、委員は、辞任の申出の日又は委員が当該申出において辞任	

を除く。)であって、学術に関する研究の動向及びこれを取り巻く内外の社会経済情勢又は産業若しくは国民生活における学術に関する研究成果の活用状況に関し広い経験と高い識見を有するもののうちから、総会が選任する。 4 選定助言委員の任期は、三年とする。ただし、補欠の選定助言委員の任期は、前任者の残任期間とする。 5 選定助言委員は、一回に限り再任されることができる。	の日をあらかじめ指定したときは、その日をもって辞任する。 5 ~~この規則前各項~~に定めるもののほか、委員の選任に関し必要な事項は、役員会が定める。 ~~—(選定助言委員会の議事)—~~ ~~第〇条—委員長は、議事を整理する。~~ ~~2—委員長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。~~ ~~3—委員会は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、委員長は、議決を経て非公開とすることができる。~~ ~~—(選定助言委員会の議決)—~~ ~~第〇条—委員会は、委員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2—委員会の議決は、出席委員の多数決による。~~ ~~3—委員会における議決の際、可否同数の場合は、委員長がこれを決定する。~~ (選定助言委員会に関する事項の役員会への委任) 第〇条 ~~この規則前条~~に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、役員会が定める。	
(運営助言委員会) 第二十七条 運営助言委員会は、次に掲げる職務を行う。 一 第三十六条第三項に規定する議案の作成に関し、会長に対し、意見を述べること。	(運営助言委員会の委員及び役員等) 第〇条 法第二十七条に規定する運営助言委員会(以下この条から第〇条までにおいて「委員会」という。)に、委員長一名及び副委員長一名を置く。	

二 前号に掲げるもののほか、会長の職務に関し、会長の諮問に応じて意見を述べること。 2 運営助言委員会は、運営助言委員十人以上十五人以内をもって組織する。 3 運営助言委員は、会員その他内閣府令で定める者以外の者であって、学術に関する研究の動向及びこれを取り巻く内外の社会経済情勢、産業若しくは国民生活における学術に関する研究成果の活用状況又は組織の経営に関し広い経験と高い識見を有するもののうちから、会長が任命する。 4 運営助言委員の任期は、三年とする。ただし、補欠の運営助言委員の任期は、前任者の残任期間とする。 5 運営助言委員は、一回に限り再任されることができる。 <準備委員会方針> ・運営助言委員の選考は新体制において行うこととする。 ・委員には、日本学術会議についてよく知っている元会員等が半数に満たない範囲で含まれることが望ましいのではないかな。 ・なお、現役の会員が運営助言委員に就任できない趣旨からすれば、現役の連携会員も運営委員に就任しないことになるのではないかな。	2 委員長は、委員の互選により選出する。 3 副委員長及び幹事は、委員会の同意を得て、委員長が指名する。 4 委員は、辞任しようとするときは、委員長に申し出るものとする。この場合において、委員は、辞任の申出の日又は委員が当該申出において辞任の日をあらかじめ指定したときは、その日をもって辞任する。 5 ~~前各項この規則~~に定めるもののほか、委員の任命に関し必要な事項は、会長が定める。 ~~（運営助言委員会の議事）~~ ~~第〇条 委員長は、議事を整理する。~~ ~~2 委員長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。~~ ~~3 委員会は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、委員長は、議決を経て非公開とすることができる。~~ ~~（運営助言委員会の議決）~~ ~~第〇条 委員会は、委員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2 委員会の議決は、出席委員の多数決による。~~ ~~3 委員会における議決の際、可否同数の場合は、委員長がこれを決定する。~~ （運営助言委員会に関する事項の役員会への委任）	
---	---	--

・委員の選考に当たっては、例えば、組織運営、経営（会計、自己資金）、国際、広報についての専門性を考慮することが望ましい。	第〇条 ~~この規則前条~~に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、役員会が定める。	
第~~七~~六章 会員		
	（会員） 第〇条 会員は、非常勤とする。ただし、会長は、総会の議を経て同意を得て、常勤とすることができる。	
（会員の選任の時期及び人数） 第二十八条 会員の選任は、三年ごとに、その員数の半数について行う。 2 総会は、会員が欠けたときは、その補欠の会員を選任することができる。 （会員の選任の決議等） 第二十九条 会員の選任は、会員候補者選定委員会が選定した会員の候補者のうちから、総会の決議により行う。 2 会議は、選任された会員の研究又は業績の内容及び選任した理由の公表その他の措置を講ずることにより、会員の選任の過程を国民に明らかにするよう努めなければならない。 （会員の候補者の選定）	（会員の選任の手続） 第〇条 連携会員（第〇条第〇項に基づき任命された連携会員【注：連携会員（特任）】を除く。以下本条において同じ。）<u>その他会員候補者選定委員会</u>が定める者は、<u>会員候補者選定委員会</u>が定めるところにより、会員の候補者~~の候補者とすべき者~~を<u>会員候補者選定委員会</u>に推薦することができる。 2 <u>前項の推薦は、別に会員候補者選定委員会</u>が定める様式により、行うこととする。 3 <u>第一項の推薦の期間は、推薦を受け付ける期間として会員候補者選定委員会</u>が公表する期間とする。 4 第一項の推薦の効力は、前項の推薦を受け付ける期間の終了日の翌日から三年間とする。 5 <u>その他会員の選任の手続に関し必要な事項は、会員候補者選定委員会</u>が定める。	●日本学術会議会則 （会員及び連携会員の選考の手続） 第八条 <u>会員及び連携会員（前条第一項に基づき任命された連携会員を除く。以下この項、次項及び第四項において同じ。）は、幹事会</u>が定めるところにより、<u>会員及び連携会員の候補者を、別に総会が定める委員会に推薦</u>することができる。 2 前項の委員会は、前項の推薦その他の情報に基づき、会員及び連携会員の候補者の名簿を作成し、幹事会に提出する。 3 幹事会は、前項の会員の候補者の名簿に基づき、総会の承認を得て、会員の候補者を内閣総理大臣に推薦することを会長に求めるものとする。 4 幹事会は、第二項の連携会員の候補者の名簿に基づき、連携会員の候補者を決定し、その任命を会長に求めるものとする。

第三十条 会員候補者選定委員会は、次条第一項に規定する選定方針に従って、会員の候補者を選定する。 2 会員候補者選定委員会は、会員、大学、研究機関、学会、経済団体その他の民間の団体等の多様な関係者から推薦を求めることその他の幅広い候補者を得るために必要な措置を講じなければならない。 3 優れた研究又は業績があるか否かの審査は、分野別業績審査委員会において行う。 4 会員候補者選定委員会は、分野別業績審査委員会が優れた研究又は業績があると認めた科学者のうちから会員の候補者の選定（補欠の会員の候補者の選定を除く。）を行うに当たっては、会員の候補者の構成について、次に掲げる事項に配慮しなければならない。 一 年齢、性別、所属する機関の種類及び所在地域等に著しい偏りが生じないようにすること。 二 先端的、学際的又は総合的な研究分野を含む多様な研究分野の科学者が含まれるようにすること。 三 国際的な研究活動、行政、産業界等との連携による活動、研究成果の活用に関する活動その他の多様な活動の実績のある科学者が含まれるようにすること。	(補欠の会員の選任の手続)	5 幹事会は、前条第一項に基づき任命される連携会員の候補者を決定し、その任命を会長に求めるものとする。 6 その他<u>選考</u>の手続に関し必要な事項は、<u>幹事会</u>が定める。 ●日本学術会議の運営に関する内規（平成 17 年幹事会決定） （会員候補者及び連携会員の候補者の推薦等） 第 6 条 <u>会員又は連携会員（会則第 7 条第 1 項に基づき任命された連携会員を除く。以下この条において同じ。）による会員候補者及び連携会員候補者の推薦は、別に幹事会が定める様式により、行うこととする。</u> 2 <u>前項の推薦の期間は、推薦を受け付ける期間として選考委員会が公表する期間とする。</u> 3 第 1 項の推薦の効力は、前項の推薦を受け付ける期間の終了日の翌日から 3 年間とする。 4 <u>1 人の会員又は連携会員が推薦できる人数は、第 2 項の推薦を受け付ける期間中、会員候補者及び連携会員候補者について、合わせて 5 人を限度とし、このうち会員候補者は 2 人を限度とする。</u> 5 <u>選考委員会は、会則第 8 条第 2 項の連携会員の候補者の名簿を作成するに当たり、会員経験者に関する情報をも収集するよう努めるものとする。</u> ●補欠の会員の選考手続について（平成 18 年幹事会申合せ）
---	----------------------	--

5 前各項に定めるもののほか、会員の候補者の選定に関し必要な事項は、日本学術会議規則で定める。	第〇条 会員が任期満子の途中において<u>法第九条第六項の規定による退職定年</u>、死亡、辞任又は解任により退任する場合の後任者となる者（以下「補欠の会員」という。）の選任は、補欠の会員となった者が任期末までに一回以上の総会（第〇条第一項【注：定期の総会】の規定により開催する総会をいう。）に出席できる場合に実施することができる。 2 会員候補者選定委員会は、法第三十一条第一項に規定する選定方針に従って、補欠の会員の候補者（以下本条において「候補者」という。）を選定する。 3 会員候補者選定委員会は、退任した会員の退任の日から起算して過去三年以内に行われた会員の選任における法第三十条第二項の規定に基づく推薦及び前条第一項の規定に基づく推薦【注：連携会員による推薦】の結果を活用する。 4 会員候補者選定委員会は、候補者<u>とすべき者の推薦を第〇条に規定する部</u>に依頼することができる。 5 依頼を受けた部は、連携会員の中から三人以内の複数の候補者<u>とすべき者</u>を選定し、会員候補者選定委員会に推薦する。 6 会員候補者選定委員会は、法第三十条第三項の規定に基づき、分野別業績審査委員会において候補者<u>とすべき者の研究又は業績に関する審査を行う。</u>	会員が任期満了の途中において定年、死亡、辞職又は免職により退任する場合、その後任者となる者（以下「補欠の会員」という。）の選考手続については、以下に定める要領に従って行うものとする。ただし、補欠の会員の選任は、少なくとも補欠の会員となった者が1回の通常総会に出席できるよう、任期末の前年の10月の総会以前の総会において補欠の会員候補者の承認を行うことができる場合に実施することができる。 1. 幹事会は、前任者の所属部等を考慮して補欠の会員の候補者（以下「候補者」という。）の推薦を依頼する部を決定する。 2. 会長は、幹事会の決定を受けて当該部に対し、候補者の推薦を依頼する。 3. 依頼を受けた部は、連携会員の中から3人以内の複数の候補者を選定し、別紙様式により選考委員会に推薦する。依頼を受けた部における候補者の選定に際しては、選出しようとする分野の学問的専門性を踏まえた審議に加え、当該分野に隣接する分野の委員の参画を得て、より多面的な視点から審議を行う。 4. 選考委員会は、前項の推薦に基づいて、順位を付して候補者の名簿を作成し、幹事会に提出する。 5. 幹事会は、前項の名簿に基づいて1人の候補者を選定し、総会の承認を得て、内閣総理大臣に推薦することを会長に求める。
--	---	--

	7 <u>会員候補者選定委員会</u>は、候補者 <u>を選定し、その名簿を総会</u>に提出する。 8 <u>その他補欠の会員の選任の手續に関し必要な事項は、会員候補者選定委員会が定める。</u>	(略)
(選定方針) 第三十一条 会議は、会員の任期の末日の六月前までに、当該任期を満了する会員の次の会員の候補者の選定及び当該次の会員の選任後三年以内に到来する会員の任期の末日までの間に行われる補欠の会員の候補者の選定に関する方針（以下「選定方針」という。）を作成しなければならない。 2 選定方針においては、次に掲げる事項を定めるものとする。 一 前条第二項に規定する措置の実施に関する方針 二 会員候補者選定委員会に置く分野別業績審査委員会の研究分野の別 三 分野別業績審査委員会が行う研究又は業績の審査の基準及び方法 四 分野別業績審査委員会が優れた研究又は業績があると認めた科学者のうちから会員の候補者を選定するための基準及び方法 五 前各号に掲げるもののほか、会員の候補者の選定に関する重要事項 3 選定方針の作成に関する決定は、総会の決議によらなければならない。	(選定方針) 第〇条 法第三十一条に規定する選定方針の作成に関し必要な事項は、会員候補者選定委員会が定める。	

4 会員候補者選定委員会は、選定助言委員会の意見を聴いて、選定方針の案を作成し、総会に提出する。 5 会議は、選定方針を作成したときは、遅滞なくこれを公表しなければならない。 6 前三項の規定は、選定方針の変更について準用する。		
	(会員の辞任) 第〇条 会員は、辞任しようとするとき又は法第九条第五項の規定により会員となることができない者に該当するに至ったとき若しくは該当することが見込まれるときは、会員候補者選定委員会に申し出るものとする。<u>ただしなお</u>、辞任しようとするときは、辞任しようとする日の三十日前までに申し出なければならない。 2 会員候補者選定委員会は、会員から辞任の申出があったときは、速やかに<u>そのことを</u>役員会に報告しなければならない。 3 会長は、会員の辞任があったときは、辞任の後に開催される最初の総会に<u>そのことを</u>報告しなければならない。	●日本学術会議会則 (会員の辞職) 第九条 幹事会は、会員から辞職の申出があったときは、法第二十五条に定める同意を得ることにつき、総会に議決を求めなければならない。ただし、当該会員の辞職の申出理由が、総会の議決を待つことが適当でないものと認められる場合は、幹事会の議決をもって同意とすることができる。 2 前項ただし書の場合、幹事会は、議決の後に開催される最初の総会に報告しなければならない。 3 幹事会は、第一項ただし書の同意を得るに当たり、別に総会が定める委員会の意見を求めることができる。
(会員の解任) 第三十二条 総会は、会員が第九条第五項の規定により会員となることができない者に該当するに至ったときは、当該会員を解任しなければならない。	(会員の解任) 第〇条 会員候補者選定委員会は、法第三十二条第二項の規定に基づき会員の解任を求めようとするときは、当該会員に弁明の機会を与えなければならない。	●日本学術会議会則 (会員の退職) 第十条 幹事会は、会員に会員として不適当な行為があると認めるときは、法第二十六条に規定する申出をすることにつき、総会に議決を求めることができる。

2 会員候補者選定委員会は、会員が会議の業務に関し著しく不適当な行為をしたと認めるときは、総会に対し、当該会員の解任を求めることができる。 3 総会は、前項の規定による解任の求めがあった場合において、当該会員が会議の業務に関し著しく不適当な行為をしたと認めるときは、当該会員を解任することができる。 4 第一項及び前項の規定による解任は、総会の決議により行う。 ※法第九条（略） 5 政府又は地方公共団体の職員（非常勤のもの及び政令で定める教育公務員又は研究公務員であるものを除く。）は、会員となることができない。	2 会員候補者選定委員会は、解任の求めに当たっては、<u>同</u>委員会における審議の経緯及びその内容並びに解任を求める理由を総会に提出しなければならない。	2 前項において、幹事会は、別に総会が定める委員会の意見を聴かなければならない。 3 前項において、前項の委員会は、当該会員に弁明の機会を与えなければならない。
第<u>八</u>七章 業務		
（会議の業務） 第三十七条 会議は、第一条の目的を達成するため、次に掲げる業務を行う。 一 学術に関する重要事項を審議し、その実現を図ること。 二 大学、研究機関、学会その他の学術に関係する者の間における連携の確保及び強化を図ること。 三 学術に関する国民の関心及び理解の増進その他の学術に関する研究を円滑に進めるための社会環境の整備を図ること。	（意思の表出） 第〇条 学術会議は、<u>法第三十七条第一号の業務として意思の表出を行うこととし、意思の表出とは、法第三十八条に定める諮問に対する答申及び法第三十九条に定める勧告のほか、次に掲げるものをいう。</u> 一 要望 二 声明 三 提言 四 見解 五 報告	●日本学術会議会則 （意思の表出） 第二条 学術会議は、<u>日本学術会議法（以下「法」という。）第四条に定める諮問に対する答申及び法第五条に定める勧告のほか、法第三条第一号の職務として、次に掲げる意思の表出をすることとし、その表出主体及び定義は別表のとおりとする。</u> 一 要望 二 声明 三 提言

四 学術に関する外国の団体及び国際団体との交流に関する業務を行うこと。 五 前各号に掲げる業務に附帯する業務を行うこと。 (諮問) 第三十八条 政府は、学術に関する重要事項について、会議に諮問することができる。 (勧告) 第三十九条 会議は、学術に関する重要事項について、政府に勧告することができる。 (協力の求め) 第四十条 会議は、第三十七条に規定する業務を行うため必要があると認めるときは、政府に対し、資料の提出、意見の開陳又は説明その他の協力を求めることができる。 <準備委員会方針> ・ 査読プロセスにおいて、査読意見の取りまとめや承認など、部の役員や分野別委員会の委員長等に負担が集中している。負担軽減のため、査読を現行の２段階から１段階に集約したり、取りまとめを他の会員に委ねたりすることは必要である。 ・ 査読体制は、「提言」は、分野別委員会等からの選出２人、科学的助言等対応委員会からの選出３人、取りまとめ（エディター）１人、「見解」は、委員会から２人、部から２人、	六 回答 2 前各号に定める意思の表出の定義は、別表第一に定めるとおりとする。 3 第一項各号に定める意思の表出は、第〇条に規定する部、第〇項に規定する委員会、第〇項に規定する分科会又は第〇項に規定する若手アカデミーにおける審議をもって、<u>別表第一の種類欄に掲げる意思の表出の区分ごとに当該区分に応じた同表の表出主体欄に掲げるものにより行うことができるそれぞれ別表第一に掲げる種類につき、同表に掲げる表出主体により行うことができる。</u> 4 意思の表出に関し必要な事項は、役員会が定める。	四 見解 五 報告 六 回答
--	--	-------------------------------------

取りまとめ（エディター）１人とするのが良いのではないか。 ・エディターは、会員・連携会員（特任含む）のうちから 30 人程度を役員会が指名して公表しておき、個別の意思の表出に対して、誰が査読者、エディターになったかは分からないようにすることが良いのではないか。 ・外部有識者から登用する査読者については、読みやすさの観点だけでなく、一般常識や外の目から見て違和感はないかといった観点からチェックしてもらうことも重要ではないか。 ・現行 8 つの種類がある意思の表出について、①トップダウン型（仮）、②ボトムアップ型（仮）と 2 種類に分けることが良いのではないか（①と②の名称は検討が必要）。 ・意思の表出の中には、１つの期内では審議が完結せず、次期へ承継した方が適切な検討課題もある。この場合、今期は「記録」として、次期へ承継することも可能であることを明記したほうがよいのではないか。その際、次期にどのように承継するかについて明確に示されているのが良い。 ・科学的助言等対応委員会については、その役割を考慮して「意思の表出対応委員会（仮称）」のような名称にしてはどうか。 ・意思の表出を政府の審議会や関係団体、学協会等の関係者にうまく届ける方法について検		
--	--	--

討すべきである。また、政府との関係においては、各府省庁の政策担当者と意思の表出の作成段階から意見を交わすことや、学術的知見が必要なときに諮問してもらう関係を構築することも重要である。これらの実現のためには、事務局や URA のような関係機関との渉外能力を有する人が調整することも考えられるため、事務局の強化も必要である。 ・意思の表出の発出までに時間を掛けていると、政府の審議会等において議論が先に進んでしまうため、特別な方法で迅速に査読を進めた方が良いものもある。委員会等において、最初の段階でその見極めをしっかりと行ったほうが良いのではないかな。 ・日本学術会議に求められている役割は、科学的な知見やエビデンスに基づき、政府や社会に対して、実現可能で信頼できる選択肢を示すことである。学術は多様であり一つの結論を出すことが必ずしも必要ではなく、両論併記や多様な意見を示すことや、学術的にはここまで言えるということを誠実に示すことが求められており、その点に留意して意思の表出を行う必要があるのではないかな。 ・長い時間を掛けて、意思の表出の内容が実現している例もあり、政府の応答や制度化については長い目で見える必要がある。 ・政策へのインパクトを評価するためのフォローアップについては、その通りに実現したか		
--	--	--

どうかのみではなく、両論併記した結果政策はどうなったかといったことや、取り入れられた点と取り入れられていない点をレビューするということが重要である。		
＜準備委員会方針＞ 地区会議、地方学術会議について ・基本的には現行制度を維持することとするが、各地区における大学等機関のバランスや、関係大学事務局等も含めた運営体制など、今後も引き続き検討すべき点がある。 ・地方学術会議の名称について、実態としては集会であるため、「地方学術集会」とすることもあり得るのではないか。	(地区会議) 第〇条 学術会議に、地域社会の学術の振興に寄与することを目的として、会員又は連携会員をもって組織する地区会議を置く。 2 <u>地区会議は、役員会が別に定める地域ごとに区分を設けることとし、各区分における構成員による運営及び活動を基本とする。</u> 3 地区会議に関し必要な事項は、<u>役員会</u>が定める。 ~~—(地方学術集会)—~~ ~~第〇条—学術会議は、地方における学術の振興を強力に促進し、もって日本の学術の更なる発展を図ることを目的として、地方学術集会を開催する。~~ ~~2—地方学術集会に関し必要な事項は、役員会が定める。~~	●日本学術会議会則 第十章 地区会議 (地区会議) 第三十三条 学術会議に、地域社会の学術の振興に寄与することを目的として、会員又は連携会員をもって組織する地区会議を置く。 2 地区会議に関し必要な事項は、<u>幹事会</u>が定める。
＜準備委員会方針＞ 会長の決定事項 ・委員会や各部が内容を精査しているものについては、柔軟に意思決定できるよう、会長の決定事項とする。 例： ・国際会議への派遣者の決定 ・分科会、小委員会の委員の決定	(日本学術会議協力学術研究団体) 第〇条 <u>学術会議は、学術研究団体及び学術研究団体の連合体のうち、学術会議の活動に協力することを申し出、会長が承認したものに日本学術会議協力学術研究団体（以下「協力学術研究団体」という。）の称号を付与する。</u> 2 学術会議は、協力学術研究団体と緊密な協力関係を持つものとする。	●日本学術会議会則 (日本学術会議協力学術研究団体) 第三十六条 学術研究団体及び学術研究団体の連合体のうち、学術会議の活動に協力することを申し出、<u>幹事会で承認されたものに日本学術会議協力学術研究団体（以下「協力学術研究団体」という。）の称号を付与する。</u>

・協力学術研究団体の承認 ・会長の決定事項であっても、会長は必要に応じて役員会の意見を聴くことができることとする。	3 前各項に定めるもののほか、協力学術研究団体に関する事項は、<u>役員会</u>が定める。	2 学術会議は、協力学術研究団体と緊密な協力関係を持つものとする。 3 <u>協力学術研究団体は、学術会議の求めに応じ、学術会議の活動に協力することができる。</u> 4 <u>協力学術研究団体は、学術会議の求めに応じ、会員又は連携会員の候補者に関する情報等を提供することができる。</u> 5 <u>学術研究団体の連合体たる協力学術研究団体は、学術会議と各学術研究団体との連絡調整を行うとともに、学術会議の各委員会の審議に協力することができる。</u> 6 前各項に定めるもののほか、協力学術研究団体に関する事項は、幹事会が定める。
<準備委員会方針> ・学術フォーラムとシンポジウムのどちらで開催するかについては、主催者が判断することが良いのではないか。そのため、厳密な定義をするのではなく、学術フォーラムは対話型で大学・研究機関だけでなく民間も含めて議論するといった方向性が示されていれば良いのではないか。 ・開催に当たっての事務局の人的支援や謝金・旅費等の支給は、内容に応じた一定の線引きが必要である（例えば、事務局の人的支援は提言等の発出に繋がるもの又はフォローアップに必要なものに限るなど）。	(シンポジウム、フォーラム等) 第〇条 学術会議は、シンポジウム、フォーラム等の開催その他の方法により、学術に関係する者や、<u>地方公共団体、地域や各種団体の代表者等</u>の間における連携の確保及び強化並びに学術に関する研究を円滑に進めるための社会環境の整備を図ることとする。 2 シンポジウム、フォーラム等の開催その他前項の活動に関し必要な事項は、役員会が定める。	

・サイエンスカフェについても、全体の予算をみつつ、一定の支援をしても良いのではないかな。 ・主催、共催、後援の種別に役割・責任や金銭負担の有無等の違いを確認するとともに、明確に規定することが必要である。また、協賛の扱いも検討すべきである。 ・学術フォーラム、シンポジウム、サイエンスカフェ等における参加費等の徴収については、一律ではなく目的を考慮して金額等を決めるのが良いのではないかな。参加費を払うことで主体的に参加してもらえという観点では行っても良いのではないかな。参加者に配布する日本学術会議グッズを考えても良いのではないかな。 ・学術フォーラムで既に行っているように公開シンポジウムも事後報告書等を公開することで質の保証に繋がるのではないかな。		
(国際団体への加入) 第四十一条 会議は、第三十七条第四号に掲げる業務を行うため、学術に関する国際団体に加入することができる。この場合において、国際団体に加入することにより会議が当該国際団体に対して会費その他の費用（内閣総理大臣の承認を受けて会議が定める額を超える額の費用に限る。）を負担する義務を負うこと	(国際活動) 第〇条 学術会議は、<u>法第四十一条に定める規定する</u>国際団体への加入のほか、次に掲げる国際活動を行う。 - 一 学術に関する国際会議等への代表の派遣 - 二 学術に関する国際会議の主催及び後援 - 三 二国間学術交流 - 四 多国間学術交流	●日本学術会議会則 (国際活動) 第三条 学術会議は、<u>法第六条の二に定める国際団体への加入のほか、法第三条第二号の職務として、次に掲げる国際活動を行うことができる。</u> - 一 学術に関する国際会議等への代表の派遣 - 二 学術に関する国際会議の主催及び後援

となるときは、あらかじめ、当該国際団体への加入について内閣総理大臣の承認を受けなければならない。 ＜準備委員会方針＞ ・法人化後の国際活動に関する内規については、現行の内規において単独主催又は共同主催の国際会議について閣議（口頭）了解を得ることとされている部分を削除することとする。 ・国際会議における総理大臣のメッセージの取得や特命担当大臣の来賓挨拶等については、広報の観点等も踏まえつつ、共同主催団体の意向等も確認の上、引き続き必要に応じて依頼する。	五 アジア学術会議に関すること。 六 その他会長が必要と認めるもの 2 学術会議は、特定の国際的枠組みにおける共同声明を発出することができる。 3 国際活動に関し必要な事項は、役員会が定める。	三 二国間学術交流 四 アジア学術会議に関すること。 五 その他会長が必要と認めるもの 2 国際活動に関し必要な事項は、幹事会が定める。
第~~九~~八章 中期的な活動計画等		
（中期的な活動計画） 第四十二条 会議は、六事業年度ごとに、内閣府令で定めるところにより、当該事業年度以後の六事業年度についての会議の業務の運営に関する計画（以下「中期的な活動計画」という。）を定めなければならない。 2 中期的な活動計画においては、次に掲げる事項を定めるものとする。 一 第三十七条に規定する業務に関する目標及びこれを達成するためにとるべき措置 二 業務運営及び財務内容の改善に関する目標並びにこれらを達成するためにとるべき措置	（中期的な活動計画等） 第〇条 法第四十二条に規定する中期的な活動計画及び法第四十三条に規定する年度計画（以下「中期的な活動計画等」という。）の作成又は変更に関する業務であって次項に定めるものは、~~別に定める別表第二に定める中期的な活動計画・年度計画~~委員会（以下本条において「委員会」という。）が実施する。 2 委員会は、中期的な活動計画等の案又はその変更案を作成し、会長に提出する。 3 その他中期的な活動計画等の作成又は変更に関し必要な事項は、委員会が定める。	

三 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画に関する事項 四 前三号に掲げるもののほか、内閣府令で定める会議の活動に関する事項 3 会議は、中期的な活動計画を定めようとするときは、日本学術会議評価委員会の意見を聴かなければならない。これを変更しようとするときも、同様とする。 4 会議は、中期的な活動計画を定め、又は変更したときは、遅滞なく、その中期的な活動計画を公表しなければならない。 （年度計画） 第四十三条 会議は、毎事業年度の開始前に、中期的な活動計画に基づき、内閣府令で定めるところにより、その事業年度の活動に関する計画（以下「年度計画」という。）を定めるとともに、公表しなければならない。これを変更したときも、同様とする。 <準備委員会方針> ・検討に当たっては、ボトムアップで会員の意見を汲み上げる仕組みも必要である。 ・中期的な活動計画期間の区切りは、会員の任期の区切りと異なるため、策定時の会員と異なるメンバーが計画に基づき活動する期間が生じることを踏まえると、柔軟な形で計画を定めること、計画期間の途中で必要に応じて見直すことが良いのではないか。		
--	--	--

・ 中期的な活動計画等について検討するための委員会を設置することとし、構成員は会長、副会長、会長特別補佐（仮称）、プラスアルファとすることが良いのではないか。		
（各事業年度に係る業務の実績等に関する評価等） 第四十四条 会議は、毎事業年度の終了後、当該事業年度が次の各号に掲げる事業年度のいずれに該当するかに応じ当該各号に定める事項について、内閣府令で定めるところにより、自ら点検及び評価を行わなければならない。 一 次号及び第三号に掲げる事業年度以外の事業年度 当該事業年度における業務の実績 二 中期的な活動計画に係る期間の最後の事業年度の直前の事業年度 当該事業年度における業務の実績及び中期的な活動計画に係る期間の終了時に見込まれる当該期間における業務の実績 三 中期的な活動計画に係る期間の最後の事業年度 当該事業年度における業務の実績及び中期的な活動計画に係る期間における業務の実績 2 会議は、内閣府令で定めるところにより、前項各号に掲げる事業年度の終了後三月以内に、当該各号に定める事項について行った同項の点検及び評価（以下「自己点検評価」という。）の方法及び結果に関する報告書（以下	（自己点検評価） 第〇条 法第四十四条に規定する自己点検評価に関する業務であって次項及びから第三項に掲げるものは、<u>別に定める別表第二に定める自己点検評価委員会</u>（以下この条及び次条において「委員会」という。）が実施する。 2 委員会は、自己点検評価書の案を作成し、会長に提出する。 3 委員会は、自己点検評価の実施に必要な範囲において、会員、連携会員及び職員並びに~~役員会、一部、委員会その他の学術会議~~の会議体（第〇条<u>第一項</u>に規定する会議体をいい、<u>総会及び別表第二に定める自己点検評価委員会を除く。</u>う。以下本条において同じ。）に活動実績に関する資料の提出、意見の聴取その他の協力を求めることができることとし、<u>会員、連携会員及び職員並びに学術会議</u>の会議体は、自己点検評価の実施に協力しなければならない。 4 会長は、法第四十四条第五項の規定に基づき、自己点検評価の結果を中期的な活動計画等及び業務の運営の改善に適切に反映させるとともに、法第四十四条第六項の規定に基づき、日本学術会議評価委員会の意見を自己点検評価の方法の改善に適切に反映させるため、学術会議の会議体の協力	

「自己点検評価書」という。)を日本学術会議評価委員会に提出するとともに、公表しなければならない。 3 日本学術会議評価委員会は、自己点検評価書に記載された自己点検評価の方法及び結果について調査審議し、必要があると認めるときは、会議に対して意見を述べることができる。 4 日本学術会議評価委員会は、会議に対して前項の意見を述べたときは、遅滞なく、内閣総理大臣に当該意見の内容を通知しなければならない。 5 会議は、自己点検評価の結果を中期的な活動計画及び年度計画並びに業務の運営の改善に適切に反映させるとともに、毎年度、当該結果の反映状況を公表しなければならない。 6 会議は、第三項の規定による日本学術会議評価委員会の意見を自己点検評価の方法の改善に適切に反映させなければならない。 <準備委員会方針> ・自己点検評価を通じて内部監査の機能を果たすこととしてはどうか。 ・評価に当たっては、前提として、日本学術会議が他の独法等とは異なり非常勤の会員により構成されていることを認識しておく必要がある。	を得て、業務及び自己点検評価の方法の改善を行う。 5 自己点検評価の実施方法、評価の基準その他自己点検評価の実施に関し必要な事項は、委員会が定める。 (外部評価) 第〇条 委員会は、自己点検評価の実施に当たって、外部の有識者による評価~~（以下本条において「外部評価」という。）~~を実施し、その結果を活用するものとする。 2 前項の有識者は、学術会議に対して利害関係を有しない者から会長が委嘱とする。ただし、やむを得ない事由があるときは、利害関係の内容を明確にするとともに、利害関係のある範囲に関する評価における議決権及び発言権を制限すること等の必要な措置を講じた上で、利害関係を有する者を前項の有識者とすることができる。	●日本学術会議会則 第十四章 雑則 (外部評価) 第三十七条 学術会議の活動を充実させるため、幹事会の定めるところにより、有識者による外部評価を定期的実施することとする。
--	--	---

・外部資金等については、獲得した外部資金等の額を評価の対象とせず、資金の獲得が自己目的化しないようにすることが重要である。 ・現行と同様の外部評価を自己点検評価において活用することとし、活動実績に対して外部評価を行い、それを踏まえて自己点検評価書の作成を行うことが良いのではないか。 ・現行と同様に、個別に外部評価有識者を委嘱し、日本学術会議へのヒアリング及び意見交換に基づき外部評価を実施することとするのが良いのではないか。		
第~~十~~九章 連携会員		
＜準備委員会方針＞ 定年 ・会員と同じく「満七十五歳に達する日以後の最初の九月三十日を経過したときに退職する」こととする。 任期 ・任期3年、再任可（ただし、通算12年まで）とする。 ※12年には、会員としての任期を含まず、現行制度における連携会員としての任期を含む（法人発足時の特例あり）。 選任時期 ・クオリティコントロールの観点から、従前どおり、会員の選任と併せて各期末に選任することとする。	（連携会員） 第〇条 <u>学術会議は、優れた研究又は業績がある科学者のうちから、連携会員を委嘱する。</u> <u>2 連携会員は、会員と連携し、法第三十七条に規定する業務に携わる。</u> <u>3 連携会員は、第〇条の委員会及び第〇条の分科会、小分科会又は小委員会の委員となることができる。</u> <u>4 連携会員は、非常勤とする。</u> <u>5 連携会員の任期は、次条の規定にかかわらず、満七十五歳に達する日以後の最初の九月三十日を経過したときに終了する。</u> （連携会員の任期）	●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百十一号） （以下「旧日本学術会議法」という。） 第十五条 <u>日本学術会議に、会員と連携し、規則で定めるところにより第三条に規定する職務の一部を行わせるため、日本学術会議連携会員（以下「連携会員」という。）を置く。</u> <u>2 連携会員は、優れた研究又は業績がある科学者のうちから会長が任命する。</u> <u>3 連携会員は、非常勤とする。</u> <u>4 前三項に定めるもののほか、連携会員に関し必要な事項は、政令で定める。</u> ●日本学術会議法施行令（平成十七年政令第二百九十九号） 第一条 <u>日本学術会議連携会員（以下「連携会員」という。）の任期は、六年とする。ただし、一定の期間内に限ってその職務を行わせ</u>

・就任に先立ち、連携会員への事前説明を十分に行うこととする。 ・就任時にミッションを明示し、しっかりと活動する意思を示していただく。 人数規模 ・連携会員の適正な規模については、今後検討が必要である。 若手登用 ・連携会員のうち 49 歳以下の割合を 2 割以上とすることを目指す。	第〇条 連携会員の任期は、<u>三年</u>とする。ただし、一定の期間内に限ってその業務に携わらせることが必要である場合には、<u>三年未満</u>の任期を定めて委嘱することを妨げない。 2 前項ただし書の規定に基づき、国際業務又は委員会の特定の専門的事項の審議に参画するため三年<u>以下未満</u>の必要な期間を定めて連携会員を委嘱することができる。 3 連携会員は、再任されることができる。 4 第一項に規定する連携会員の任期は、<u>通算で十二年（第二項に規定する連携会員としての任期を除く。）</u>までとする。ただし、日本学術会議法（昭和二十三年法律第百二十一号）第十五条第一項に規定する日本学術会議連携会員の任期をこれに含める。	ることが必要である場合には、<u>六年未満</u>の任期を定めて任命することを妨げない。 2 連携会員は、再任されることができる。 ●日本学術会議会則 （連携会員の任期の例外） 第七条 日本学術会議法施行令（平成十七年政令第二百九十九号、以下「令」という。）<u>第一条第一項ただし書の規定に基づき、国際業務又は委員会の特定の専門的事項の審議に参画するため三年以下の必要な期間を定めて日本学術会議連携会員（以下「連携会員」という。）を任命することができる。</u> 2 前項に定めるもののほか、令第一条第一項ただし書の規定に基づき、学術会議の活動に参画させるため、必要な期間を定めて連携会員を任命することができる。 （連携会員の再任） 第十二条 連携会員の再任の回数は、二回を限度とする。ただし、任命の時点で七十歳以上であるときは、当該任期限りとする。 2 前項の再任の回数には、会員に任命された場合を連携会員として任命されたものとみなして、これに含める。 3 第一項の規定は、第七条第一項に基づき任命された連携会員には適用しない。
--	---	--

		(連携会員の補欠の者の任期) 第十一条 連携会員の補欠の者の任期は、前任者の残任期間とする。
<準備委員会方針> 令和8年10月の特例(1) 現行の会員(25-26期)のうち就任意思がある者は現体制における選考に基づき法人化後に連携会員に任命(任期3年)することとし、現行の連携会員(25-26期、26-27期)は、本人の意思を確認の上、任期を3年延長する。	附 則 【※暫定的にこの位置に記載】 (経過措置) 第〇条 会長は、令和八年十月一日から令和八年十二月三十一日までの間、第〇条第〇項ただし書きの規定【注：現行連携会員としての任期を12年にカウントすること】及び第〇条第二項から第六項までの規定【注：連携会員の選考手続きを踏むこと】にかかわらず、連携会員の委嘱を決定することができる。	【参考】 ●日本学術会議会則 (経過措置) 第二条 令第一条の連携会員のうち、平成十七年十月四日から平成十八年九月三十日までに任命される者の任期の終期は、平成二十三年九月三十日までの間で会長が指定する。 2 前項の連携会員のうち、半数の者の任期は、平成二十年九月三十日までとするよう努めるものとする。 第三条 会長は、平成十七年十二月三十一日までの間、委員会又は地区会議の活動のため特に必要があると認める場合、第八条の規定にかかわらず、平成十八年六月三十日までの必要な期間を定め、連携会員を任命することができる。 2 前項に基づき任命された連携会員は、第八条第一項の推薦をすることはできない。 3 第十二条第一項の規定は、第一項に基づき任命された連携会員には適用しない。
	(連携会員の選考の手続) 第〇条 <u>連携会員の委嘱は、会長が決定する。</u> 2 会員及び連携会員(第〇条第〇項に基づき任命された連携会員【注：連携会員(特任)】を除く。以下この項、次項及び第四項において同じ。)は、	●日本学術会議会則 (会員及び連携会員の選考の手続) 第八条 会員及び連携会員(前条第一項に基づき任命された連携会員を除く。以下この項、次項及び第四項において同じ。)は、幹事会が

	<u>役員会</u>が定めるところにより、<u>連携会員</u>の候補者を、別に<u>役員会</u>が定める委員会【注：連携会員選考委員会（役員会附置委員会）】に推薦することができる。 3 前項の委員会は、前項の推薦その他の情報に基づき、<u>連携会員</u>の候補者の名簿を作成し、<u>役員会</u>に提出する。 4 <u>役員会</u>は、<u>前項</u>の<u>連携会員</u>の候補者の名簿に基づき、<u>連携会員</u>の候補者を決定し、その<u>委嘱</u>を会長に求めるものとする。 5 <u>役員会</u>は、<u>第〇条第〇項</u>に基づき<u>委嘱</u>される<u>連携会員</u>【注：特任連携会員】の候補者を決定し、その<u>委嘱</u>を会長に求めるものとする。 6 その他選考の手續に関し必要な事項は、<u>役員会</u>が定める。	定めるところにより、<u>会員及び連携会員</u>の候補者を、別に<u>総会</u>が定める委員会に推薦することができる。 2 前項の委員会は、前項の推薦その他の情報に基づき、<u>会員及び連携会員</u>の候補者の名簿を作成し、<u>幹事会</u>に提出する。 3 <u>幹事会</u>は、<u>前項の会員の候補者の名簿に基づき、総会の承認を得て、会員の候補者を内閣総理大臣に推薦することを会長に求めるものとする。</u> 4 <u>幹事会</u>は、<u>第二項</u>の<u>連携会員</u>の候補者の名簿に基づき、<u>連携会員</u>の候補者を決定し、その<u>任命</u>を会長に求めるものとする。 5 <u>幹事会</u>は、<u>前条第一項</u>に基づき<u>任命</u>される<u>連携会員</u>の候補者を決定し、その<u>任命</u>を会長に求めるものとする。 6 その他選考の手續に関し必要な事項は、<u>幹事会</u>が定める。
	（<u>連携会員の辞任</u>） 第〇条 <u>連携会員</u>は、辞任しようとするときは、辞任しようとする日の三十日前までに会長に申し出るものとする。 2 会長は、<u>連携会員</u>の辞任があったときは、<u>役員会</u>に報告しなければならない。	●日本学術会議法施行令 （<u>連携会員の辞職</u>） 第二条 会長は、<u>連携会員</u>から病気その他やむを得ない事由による辞職の申出があったときは、その辞職を承認することができる。 ●日本学術会議会則 （<u>連携会員の辞職</u>）

		第十三条 令第二条の辞職の申出があったときは、会長は、その承認について、幹事会の同意を得なければならない。 2 幹事会は、前項の同意をするに当たり、第九条第三項の委員会の意見を求めることができる。
	(連携会員の解嘱) 第〇条 会長は、<u>連携会員が会議の業務に関し著しく不適當な行為をしたと認めるときは</u>、当該連携会員を<u>解嘱することができる</u>。 2 <u>役員会は、連携会員が会議の業務に関し著しく不適當な行為をしたと認めるときは</u>、当該連携会員を<u>解嘱すること</u>を、会長に求めることができる。 3 前項において、<u>役員会</u>は、<u>第〇条第〇項の委員会</u>【注：連携会員選考委員会】の意見を聴かななければならない。 4 前項において、<u>第〇条第〇項の委員会</u>【注：連携会員選考委員会】は、当該連携会員に弁明の機会を与えなければならない。	●日本学術会議法施行令 (連携会員の退職) 第三条 会長は、<u>連携会員に連携会員として不適當な行為があるときは</u>、<u>日本学術会議法第二十八条の規定による規則</u>（以下単に「規則」という。）で定めるところにより、<u>当該連携会員を退職させることができる</u>。 ●日本学術会議会則 (連携会員の退職) 第十四条 <u>幹事会</u>は、<u>連携会員に連携会員として不適當な行為があると認めるときは</u>、<u>令第三条に基づき当該連携会員を退職させること</u>を、会長に求めることができる。 2 前項において、<u>幹事会</u>は、<u>第十条第二項の委員会</u>の意見を聴かななければならない。 3 前項において、<u>第十条第二項の委員会</u>は、当該連携会員に弁明の機会を与えなければならない。

<準備委員会方針> ○部について ・ 3部制を維持する。 ・ 各部の人数は概ね均等とする。 ・ 会員はいずれか1つの部に所属する。 ・ 領域横断的な専門分野の会員も、1つの部に軸足を置き、分野横断的な委員会等で活躍いただく。 ・ 各部横断的な連絡手段を設けることや委員会活動等により、分野横断的な活動を促進することとする。	(部) 第〇条 学術会議に、次の三部を置く。 第一部 第二部 第三部 第〇条 第一部は、<u>人文及び社会科学</u>を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>第〇章の規定による</u>学術会議の<u>業務</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 2 第二部は、生命科学を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>第〇章の規定による</u>学術会議の<u>業務</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 3 第三部は、理学及び工学を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>第〇章の規定による</u>学術会議の<u>業務</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 4 会員は、前条に掲げる部のいずれかに属するものとする。	●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号） 第十条 <u>日本学術会議</u>に、次の三部を置く。 第一部 第二部 第三部 第十一条 第一部は、<u>人文科学</u>を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>前章の規定による日本学術会議の職務及び権限</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 2 第二部は、生命科学を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>前章の規定による日本学術会議の職務及び権限</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 3 第三部は、理学及び工学を中心とする科学の分野において優れた研究又は業績がある会員をもって組織し、<u>前章の規定による日本学術会議の職務及び権限</u>のうち当該分野に関する事項をつかさどる。 4 会員は、前条に掲げる部のいずれかに属するものとする。 ●日本学術会議会則 (部への所属)
---	--	---

	5 前項に規定する会員の部への所属は、会員からの申出に基づき総会が定める。	第六条 法第十一条第四項に規定する会員の部への所属は、会員からの申出に基づき総会が定める。
<準備委員会方針> ○部の役員 ・部の幹部の役職・人数は、部長1人、副部長2人、幹事2人とする。幹事については、学術会議の活動歴が長くない会員が就任することあることから、部長・副部長のサポートを行う役職として必要ではないか。 ・部長の選出方法は、原則として、自薦他薦を可能とした上で互選とする。選出手続の細部は各部に委ねる。	第〇条 各部に、部長一人、<u>副部長二人</u>及び幹事二人を置く。 2 部長は、その部に属する会員の互選によって定める。 3 副部長及び幹事は、その部に属する会員のうちから、部会の同意を得て、部長が指名する。 4 <u>部長の任期は、三年とする。ただし、再選されることができる。</u> 5 <u>副部長及び幹事の任期は、三年とする。ただし、再任されることができる。</u> 6 <u>補欠の部長、副部長又は幹事の任期は、前任者の残任期間とする。</u> 第〇条 部長は、部務を掌理する。 2 <u>部長は、あらかじめ、副部長のうちから、部長に事故がある場合に部長の職務を代理する者を定めておかなければならない。</u> 3 副部長は、部長を補佐し、部長に事故があるときは、その職務を代理し、<u>部長が欠員のときはその職務を行う。</u> 4 幹事は、部長の命を受け、部務に従事する。	●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号） 第十二条 各部に、部長一人、<u>副部長一人</u>及び幹事二人を置く。 2 部長は、その部に属する会員の互選によって定める。 3 副部長及び幹事は、その部に属する会員のうちから、部会の同意を得て、部長が指名する。 4 <u>第八条第四項及び第六項の規定は部長について、同条第五項及び第六項の規定は副部長及び幹事について、それぞれ準用する。</u> 第十三条 部長は、部務を掌理する。 2 副部長は、部長を補佐し、部長に事故があるときは、その職務を代理する。 3 幹事は、部長の命を受け、部務に従事する。

		●日本学術会議法（令和 7 年法律第 70 号） 第十一条 （略） 5 会長は、あらかじめ、副会長のうちから、会長に事故がある場合に議長の職務を代理する者を定めておかなければならない。 第十七条 （略） 2 副会長は、会長の定めるところにより、会長に事故があるときはその職務を代理し、会長が欠員のときはその職務を行う。
	（部会及び連合部会の招集） ~~第〇条 学術会議に、各部に関する事項を審議するため、部ごとに、部会を置く。部会は、各部に関する事項を審議し、~~ ~~2 各部会は、各部に属する会員をもって組織し、部長が長となる。~~ ~~2 部会は、部長がこれを招集する。ただし、会長（会長が任期途中で退任した場合の後任の者を除く。）の任期における最初の部会は、会長が招集する。~~ （部会及び連合部会の招集） 第〇条-2 部長は、当該部に属する三分の一以上の会員から招集の目的及び議案を示して請求がある場合、部会を招集しなければならない。 2-3 連合部会は、二以上の部門に関連する事項を審議し、関係する部の部長が、共同してこれを招集する。	●日本学術会議法（昭和二十三年法律第百二十一号） 第二十三条 （略） 3 部会は、各部に関する事項を審議し、部長がこれを招集する。 4 連合部会は、二以上の部門に関連する事項を審議し、関係する部の部長が、共同してこれを招集する。 ●日本学術会議会則 （部会及び連合部会の招集） 第二十条 部会は、部長が招集する。ただし、会長（補欠の者を除く。）の任期における最初の部会は、会長が招集する。 2 部長は、当該部に属する三分の一以上の会員から招集の目的及び議案を示して請求がある場合、部会を招集しなければならない。 3 連合部会は、二以上の部門に関連する事項を審議し、関係する部の部長が、共同してこれを招集する。

	<u>3.4</u> 二以上の部において、当該部に属する三分の一以上の会員から招集の目的及び議案を示して請求がある場合、これらの部の部長は、共同して連合部会を招集しなければならない。 <u>(連合部会の議長)</u> <u>第〇条 連合部会の議長は、開催の都度、連合部会を構成する部の部長の協議により定められ、連合部会の議事を整理する。</u> ~~—(部会及び連合部会の議長等)—~~ ~~第〇条 部長は、部会の議長となり、議事を整理する。~~ ~~2 連合部会の議長は、開催の都度、連合部会を構成する部の部長の協議により定められ、連合部会の議事を整理する。~~ ~~3 議長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。~~ ~~4 部会及び連合部会は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、議長は、議決を経て非公開とすることができる。~~	4 二以上の部において、当該部に属する三分の一以上の会員から招集の目的及び議案を示して請求がある場合、これらの部の部長は、共同して連合部会を招集しなければならない。 (部会及び連合部会の議長等) 第二十一条 部長は、部会の議長となり、議事を整理する。 2 連合部会の議長は、開催の都度、連合部会を構成する部の部長の協議により定められ、連合部会の議事を整理する。 3 部会及び連合部会の会議については、第十八条（第一項及び第五項を除く。）の規定を準用する。
	~~—(部会及び連合部会の議決)—~~ ~~第〇条 部会及び連合部会は、会員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2 部会及び連合部会の議決は、出席会員の多数決による。~~	~~●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号）~~ ~~第二十四条 総会は、会員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2 総会の議決は、出席会員の多数決による。~~ ~~3 部会及び連合部会の会議については、前二項の規定を準用する。~~

	~~3—部会及び連合部会における議決の際、可否同数の場合は、議長がこれを決定する。~~ (部会及び連合部会における議決方法の特例) 第〇条 部会及び連合部会においては、<u>第〇条</u>の規定にかかわらず、部長が<u>当該部に属する</u>各会員の賛否を確認した上で、部会又は連合部会の議決とすることができる。	●日本学術会議会則 (部会における議決方法の特例) 第二十二條 部会及び連合部会においては、<u>法第二十四條第三項が準用する同條第一項及び第二項の規定にかかわらず</u>、部長が各会員の賛否を確認した上で、部会又は連合部会の議決とすることができる。
第十<u>三</u>章 委員会		
＜準備委員会方針＞ ○課題別委員会、機能別委員会 ・課題別委員会は、その時々の執行部によるトップダウンで課題を設定する必要があることから、前期からの申し送りに基づき、期ごとに設置する。ただし、防災・減災等の長期的な課題については、継続することが望ましい。 ・現行と同様に機能別委員会を設置する。ただし、法人化に伴い新たな委員会の設置が必要ではないか。 例：中期的な活動計画・年度計画、自己点検評価に対応する委員会、外部資金に関する委員会 ○分野別委員会及び分科会	(委員会の設置) 第〇条 <u>学術会議に</u>、常置の委員会として、機能別委員会及び分野別委員会並びに臨時の委員会として、課題別委員会及びその他<u>役員会</u>の議決により置かれる委員会を設置する。 2 機能別委員会は、別表第2のとおり設置することとし、運営に関する事項は、<u>役員会</u>が定める。	●日本学術会議会則 (学術会議の会議) 第十六條 <u>学術会議の会議は、総会、部会及び連合部会のほか、幹事会並びに法第十五條の二の規定により置かれる常置の委員会として、機能別委員会及び分野別委員会並びに臨時の委員会として、課題別委員会及びその他幹事会の議決により置かれる委員会とする。</u> 2 常置の委員会は、総会が定めるところにより置く。 3 臨時の委員会に関し必要な事項は、<u>幹事会</u>が定める。 ●日本学術会議細則 (常置の委員会の設置) 第10條 機能別委員会は、別表第2のとおり設置することとし、運営に関する事項は、<u>幹事会</u>が定める。

・分野別委員会は、現行の 30 委員会を概ね維持しつつ、追加の委員会の設置もあり得るが、課題別委員会等である程度確立した分野を加える方が良いのではないか。 ・今の分野別委員会の数は各部につき概ね 10 となっているが、必ずしも委員会の数を各部で均等にする必要はなく、各分野の動向に合った構成とすることが良いのではないか。また、部を横断する分野別委員会や、課題別委員会との関係を考慮することも肝要である。 ・加盟国際学術団体に対応する委員会等の法人化後直ちに活動する必要のある委員会は早期に活動を開始できるように、今期中にその継続について審議する。	3 分野別委員会は、別表第 3 に掲げるものを設置することとし、運営に関する事項は、<u>役員会</u>が定める。 4 臨時の委員会に関し必要な事項は、<u>役員会</u>が定める。	2 分野別委員会は、別表第 3 に掲げるものを設置することとし、<u>調査及び審議すべき事項並びに</u>運営に関する事項は、<u>幹事会</u>が定める。
<準備委員会方針> ・分野別委員会の下の分科会は、期ごとに設置する。必要性について精査した上で設置することが必要である。	(委員会に置かれる分科会、小分科会又は小委員会) 第〇条 <u>第〇条第〇項</u>の委員会（以下「委員会」という。）には、<u>役員会</u>の定めるところにより、分科会、小分科会又は小委員会を置くことができる。 2 委員会は、その定めるところにより、分科会の議決をもって委員会の議決とすることができる。ただし、<u>法第三十八条</u>の諮問に対する答申及び<u>法第三十九条</u>の勧告並びに<u>第〇条</u>に規定する意思の表出（見解及び報告を除く。）に関してはこの限りでない。	●日本学術会議会則 (委員会に置かれる分科会、小分科会又は小委員会) 第二十七条 <u>第十六条第一項</u>の委員会（以下「委員会」という。）には、<u>幹事会</u>の定めるところにより、分科会、小分科会又は小委員会を置くことができる。 2 委員会は、その定めるところにより、分科会の議決をもって委員会の議決とすることができる。ただし、<u>法第四条</u>の諮問に対する答申及び<u>法第五条</u>の勧告並びに<u>第二条</u>に規定する意思の表出（見解及び報告を除く。）に関してはこの限りでない。

<準備委員会方針> ・連携会員（連携会員（特任）を含む。）は分科会の委員長に就任可能とする。 ・委員会に所属する委員の人数は、議論するに当たって適切な人数とすべきである。	（委員会の委員及び役員等） 第〇条 <u>会員は、少なくとも一つの分野別委員会に所属するものとし、委員は、会長が決定委嘱する。</u> 2 委員会に<u>は</u>、委員長一名及び副委員長一名を置く。<u>その他必要に応じて幹事を若干名置くことができる。</u> 3 委員長は、委員の互選により選出する。ただし、機能別委員会の委員長は、<u>会長、副会長又は会長特別補佐のうちから役員会が定める。</u> 4 副委員長及び幹事は、委員会の同意を得て、委員長が指名する。 5 <u>委員は、辞任しようとするときは、委員長に申し出るものとする。この場合において、委員は、辞任の申出の日又は委員が当該申出において辞任の日をあらかじめ指定したときは、その日をもって辞任する。</u>	●日本学術会議会則 （委員会の委員及び役員） 第二十八条 委員は、会長が委嘱する。 2 <u>委員は、委員会の承認を得て辞任することができる。</u> 3 委員会には、委員長一名、副委員長一名及び幹事二名を置く。 4 委員長は、委員の互選により選出する。ただし、機能別委員会の委員長は、<u>総会</u>が定める。 5 副委員長及び幹事は、委員会の同意を得て、委員長が指名する。
	~~（委員会の招集）~~ ~~第〇条 委員会は、委員長が招集する。ただし、会長（会長が任期途中で退任した場合の後任の者を除く。）の任期における最初の委員会は会長が招集する。~~ ~~（委員会の議長等）~~	●日本学術会議会則 ~~（委員会の招集）~~ ~~第二十九条 委員会は、委員長が招集する。ただし、初回の委員会は会長が招集する。~~ ~~（委員会の議長等）~~ ~~第三十条 委員長は委員会の議長となり、議事を整理する。~~

	~~第〇条—委員長は委員会の議長となり、議事を整理する。~~ ~~2—議長は、必要と認められる者の出席を求め、意見を聞くことができる。~~ ~~3—委員会は、これを公開する。ただし、必要があると認められる場合、議長は、議決を経て非公開とすることができる。~~ ~~—(委員会の議決)—~~ ~~第〇条—委員会は、委員の二分の一以上の出席がなければ、これを開くことができない。~~ ~~2—委員会の議決は、出席委員の多数決による。~~ ~~3—委員会における議決の際、可否同数の場合は、議長がこれを決定する。~~ (委員会における議決方法の特例) 第〇条 委員会においては、第〇条の規定にかかわらず、委員長が各会員の賛否を確認した上で、委員会の議決とすることができる。 (委員会に関する事項の役員会への委任) 第〇条 前各条に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は役員会が定める。	~~—(委員会の会議)—~~ ~~第三十一条—委員会の会議については、法第二十四条第一項及び第二項並びに第十八条（第一項及び第五項を除く。）及び第二十二条の規定を準用する。~~ (委員会に関する事項の幹事会への委任) 第三十二条 前五条に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は幹事会が定める。
第十 ~~三二~~ 章 若手アカデミー		
＜準備委員会方針＞ 若手アカデミーについて	(若手アカデミー)	●日本学術会議会則 (若手アカデミー)

・現在の年齢要件では、分野によっては若手アカデミー会員として活躍できないという事情に鑑み、若手アカデミーの年齢要件は50歳未満（50歳に達する日以後の最初の9月30日をもって所属を終える）とし、40代半ば以下の人数が多くなるようにすることが良いのではないか。 ・特に第27期に移行するに当たり、連携会員（特任）を活用し、若手アカデミーに相応しい者を推薦して若手アカデミー会員に加えることもあり得るのではないか。 ・若手アカデミーの会員は、若手研究者として日本を代表して国際活動等を行うことを踏まえ、若手アカデミー会員の決定に当たっては、積極的な参加意思を持つ者からの応募の後、例えば、抱負を含めた応募書類の確認及び役員会（幹事会）による面接等の方法により、選考を行うことが良いのではないか。 ・第一部～第三部のバランスなど、専門分野の多様性を考慮する必要があるのではないか。	第〇条 学術会議に、若手科学者の連携を図り、その活動を通じて学術の振興に寄与することを目的として、会員又は連携会員をもって組織する若手アカデミーを置く。 <u>2 若手アカデミーに、若手アカデミーに所属する会員又は連携会員（第〇条第〇項に基づき任命された連携会員【注：連携会員（特任）】を含む。）をもって組織する若手アカデミー会議を置くとともに、役員会の定めるところにより、分科会を置くことができる。</u> <u>3-2 若手アカデミーに関し必要な事項は、役員会が定める。</u>	第三十四条 学術会議に、若手科学者の連携を図り、その活動を通じて学術の振興に寄与することを目的として、会員又は連携会員をもって組織する若手アカデミーを置く。 2 若手アカデミーに関し必要な事項は、<u>幹事会</u>が定める。
第<u>十四</u>章 事務局		
＜準備委員会方針＞ ・事務局が、意思の表出において、過去の意思の表出との整合性、文言の適正化、形式性等について補佐することができることとし、その旨を規則に定める。	（事務局） 第〇条 学術会議に、<u>学術会議に関する事務を処理するため、事務局を置く。</u> 2 事務局に、<u>事務局長その他の所要の職員を置く。</u>	●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号） 第十六条 <u>日本学術会議に、事務局を置き、日本学術会議に関する事務を処理させる。</u> 2 事務局に、<u>局長その他の所要の職員を置く。</u> 3 <u>前項の職員の任免は、会長の申出を考慮して内閣総理大臣が行う。</u>

	3 事務局長は、<u>役員</u>の職務を助け、学術会議の運営に参画し、事務局の事務を統理する。 4 事務局長は、総会において議長を補佐し、必要な場合には意見を述べることができる。 5 事務局長は、<u>役員会、会員候補者選定委員会、選定助言委員会、運営助言委員会、部会、連合部会及び委員会に、必要な場合に</u>出席し意見を述べることができる。	●日本学術会議事務局組織規則（平成 17 年日本学術会議規則第 1 号） （事務局長） 第一条 <u>日本学術会議の運営においては、事務局長を事務総長と称する。</u> 2 事務局長は、<u>会長及び副会長</u>の職務を助け、<u>日本学術会議の運営に参画し、事務局の事務を統理する。</u> 3 <u>事務局長は、会長及び副会長共に事故のあるとき又は共に欠けたときは、臨時に会長の職務を行う。</u> 4 事務局長は、総会及び幹事会において議長を補佐し、必要な場合には意見を述べることができる。 5 事務局長は、部会、連合部会及び委員会に出席し意見を述べることができる。 【参考】日本学術会議法（令和 7 年法律第 70 号） （総会の組織） 第十一条 （略） 5 会長は、あらかじめ、副会長のうちから、会長に事故がある場合に議長の職務を代理する者を定めておかなければならない。 （副会長の職務） 第十七条 （略）
--	--	--

		2 副会長は、会長の定めるところにより、会長に事故があるときはその職務を代理し、会長が欠員のときはその職務を行う。
第十 <u>五</u> 章 雑則		
【参考】 第三十六条 この法律の他の規定により総会の決議によることとされているもののほか、次に掲げる事項の決定は、総会の決議によらなければならない。 (一～七 略) 八 日本学術会議規則の制定又は改廃 第十三条 (略) 2 総会の議事は、議決に加わることができる会員の二分の一以上が出席し、出席した当該会員の過半数をもって決する。可否同数のときは、議長が決する。 3 前項の規定にかかわらず、次に掲げる総会の決議は、議決に加わることができる会員の三分の二以上に当たる多数をもって行わなければならない。 一 第三十二条第四項の総会の決議 二 第三十三条第二項の承認に係る第三十六条第一項の総会の決議 4 前二項の決議について特別の利害関係を有する会員は、議決に加わることができない。 5 (略)	(会則の改正) 第〇条 この会則の改正は、<u>法第十三条第二項の規定にかかわらず</u>、総会において出席会員の三分の二以上の賛成がなければ、これを行うことができない。	●日本学術会議会則 (会則の改正) 第三十九条 この会則の改正は、総会において出席会員の三分の二以上の賛成がなければ、これを行うことができない。 【参考】 ●日本学術会議法（昭和二十三年法律第二百一十一号） 第二十四条 (略) 2 総会の議決は、出席会員の多数決による。 3 (略)

附則【※これより上部に既に記載したものを除く。】		
	附 則 （施行期日） 第一条 この会則は、決定の日から施行する。	●日本学術会議会則 附 則 （施行期日） 第一条 この会則は、公布の日より施行し、平成十七年十月四日から適用する。

別表第二

種類	表出主体	定義
要望	学術会議	学術会議が政府及び関係機関等の実現を望む意思表示をすること。
声明	学術会議	学術会議がその目的を遂行するために特に必要と考えられる事項について、意見等を発表すること。
提言	学術会議	学術会議が科学的知見に基づき総合的・俯瞰的な見地から政府や関係機関、広く社会に向けた提案を発表すること。
見解	部、委員会、分科会 又は若手アカデミー	部、委員会、分科会又は若手アカデミーが科学的知見に基づき専門的な見地から政府や関係機関、広く社会に向けた提案を発表し、又は、社会的な議論を喚起するため多様な意見を提示すること。
報告	部、委員会、分科会 又は若手アカデミー	部、委員会、分科会又は若手アカデミーが審議の結果を発表すること。
回答	学術会議	関係機関からの審議依頼（法第三十八条の諮問を除く。）事項に対し、学術会議が回答すること。

別表第 ~~二~~2

委員会名	職務
企画委員会	中期的な活動計画及び年度計画等の実現等に関する事、外部資金等の戦略に関する事
科学者委員会	科学者の在り方、人権及び自由交流に関する事、科学における男女共同参画に関する事、日本学術会議協力学術研究団体に関する事、その他科学者間の連携に関する事
意思の表出対応委員会	部、委員会、分科会又は若手アカデミーからの検討課題に係る申出に対する助言、査読又は承認、事後的な評価、その他の意思の表出に関する事
社会活動・広報委員会	フォーラム・シンポジウム等に関する事、地区会議に関する事、 ~~地方学術会議~~ 日本学術会議が実施する地方における学術の振興に関する事（地区会議が実施するものを除く。）、学術会議全体としての広報に関する事、国民の科学に対する理解の増進、その他社会及び国民等との関係に関する事
国際委員会	学術会議における国際活動の調整、その他学術会議の国際的対応に関する事
財務委員会	学術会議に係る予算・決算に関する事
中期的な活動計画・年度計画委員会	中期的な活動計画及び年度計画の立案等に関する事
自己点検評価委員会	自己点検評価、外部評価、その他業務の実績の報告及び評価に関する事
会長候補者選考委員会	会長候補者の選考に関する事

別表第 ~~三~~3

委員会名	委員会名	委員会名
言語・文学委員会	基礎生物学委員会	数理科学委員会
哲学委員会	統合生物学委員会	物理学委員会
心理学・教育学委員会	農学委員会	地球惑星科学委員会
社会学委員会	食料科学委員会	情報学委員会
史学委員会	基礎医学委員会	化学委員会
地域研究委員会	臨床医学委員会	総合工学委員会
法学委員会	健康・生活科学委員会	機械工学委員会
政治学委員会	歯学委員会	電気電子工学委員会
経済学委員会	薬学委員会	土木工学・建築学委員会
経営学委員会	環境学委員会	材料工学委員会